

機械・婦人・新聞・労働力

アメリカに来てわれわれ々日本人が、身近かなところで驚くことはいろいろあるが、なかでも自動車馬鹿に多いこと、新聞の頁数が毎日四十頁にもなっていること、石鹸は矢鱈に使つてもよいとしてホテルの部屋に毎日五、六個宛おいてくれるのに洗濯代がどうしたものか高いこと、御婦人が何によらず大事にされていることなどが特に目に立つ。勿論アメリカの自動車というのは、日本における自転車と同様に各家庭は大抵もっているとか、御婦人が尊重されること位は進駐軍兵士の日常の所作からわれわれに珍しいことではないが、事実、街を歩いて牛馬車に全然会わないことはともかくとしても、未だに自転車に会ったことがないのだから、自動車の普及度は大体見当がつくし、エレベーターに乗っている時、御婦人が乗り込まれると帽子をとることが礼儀になっていることは、こちらに来て始めて知った。

ワシントン大学のグレイ教授に、この婦人尊重思想はどうして発達したのかと聞けば、
「それは機械尊重と同様、アメリカ開拓における労働力の絶対的不足が生んだ産物です。欧

州の旧世界から移住して来た移民がまず痛感したのは、彼等が立向う自然の大きさに比べて彼等のもつ労働力の不足でした。また最初移住してくる時は働き盛りの男子が多く、女子が少いということも手伝って、婦人がこの新世界では珍重されて来たわけです」という。

「しかし聞くところによると、もうアメリカの国勢調査では、男女はほぼ同数になったというから、この婦人尊重の慣習というものも、だんだん廃れて行くことになりはしないですか」と質問したら、教授は

「然りとも否とも答えられる。大勢としては一応そのようなことがいわれるが、長い間に醸成されて社会的実践の隅々にまで浸透したこの伝習は、そう簡単には廃れますまい」と答えた。

新聞といえば、この地の新聞という新聞は殆んど四十頁前後で、日曜版などは百頁を越えている。ニューヨークの「タイムス」にしても、ワシントンの「モーニング・ポスト」にしても、シカゴの「トリビュン」にしても、みなそうである。勿論、広告に割愛した紙面が半分近くあるにしても、なかなか豊富な内容だ。われわれの教養なり思考力は、学校で養ったというのはごく一部分で、大部分は毎日の実践から汲みとったものだから、毎日見る新聞の内容如何は、その国の文化水準に大きく影響するものと思われる。日本も早くもこのように八頁から十

六頁の新聞にとり戻したいものだと思う。そこで八月二十三日に当地の「モーニング・ポスト」社に行つて、ニッポンタイムス社におられるアルフレド・フレンドリー氏を訪ね、アメリカの新聞事情を叩いてみた。

彼は洗濯してアイロンをかけないような服を無造作に着ていて、身なりにかまわない人だ。

「アメリカでは五千万部の新聞が出ています。人口に対する発行部数の比率では世界最高でしょう。アメリカの新聞の特徴とする処は、まず第一に、どの新聞も完全な自由を享受していることです。政府や特定の政党と何等の關係ももっていない自由な新聞であることです（唯一つの例外はニューヨークにある「デイリー・ワーカー」という共産系の新聞です）。またその内容から言えば、ニュースと論説を厳密に分けてあることだといえましょう。それに建國当初から新聞の自由ということが、われわれ国民によつて立國の精神の大きい支柱として守護されて来ているので、取材活動といい、その発表といい、いずれの面においても、最高度の自由をうけているといえましょう。そしてその威力は相当根強いものです」

「ところが最近ラジオとテレビジョンが高度の發展を遂げて、社会的影響力の面では新聞を凌ぐ場合があります。例えば、故ルースベルト大統領の三回目立候補の時、各新聞は挙げ

て反対の論説を掲げたわけですが、家庭に浸透して親しまれているラジオを通じての彼の巧妙な宣伝の前には、全新聞が大敗を喫した経験がありますよ」といつていた。

石鹸が安いのに洗濯代が高いというのは、確かに一つの矛盾のように思われるが、よく吟味すると、前者は大量生産でコストは安いが、後者は労働力が高いからだという説も出来る。時計を修繕に出そうとして修繕代をと聞けば二十ドルだという。それでは二十ドルで新品を買った方が得だということでこれを買って来たと、大蔵省の渡辺財務官は笑っていた。

「してみるとこの国では洗濯や修繕はよくよくの場合に限って、新品をつぎからつぎへと買つて使うのが賢明なやり方だね」と聞きただせば、副財務官の杉山君は

「アメリカというところは、どうして早く古い物を捨てるかを考えなければならぬ国だよ。その証拠に洋服はもうオフ・シーズンで半値で叩き売っているだろう」といつていた。

大学と研究所

九月二十六日早朝、私は四十日間も滞在したワシントンに別れを惜しみつつ、ユニオン停車場からバルチモアに向つた。約一時間の行程である。

ここはチエサピーケ湾に面した良港で、貨物の積卸トン数はニューヨークに次ぐ米国第二の商港であり、鉄鋼業、造船業、食品加工業などの盛んなところである。人口は百七十万というから、まず米国第六位の大都会に当るわけである。ここでは予定通り市の西北部の閑静な地帯にあるジョン・ホプキンズ大学を見学した。御承知のようにアメリカで歴史のある有名な大学は大抵私立だが、この大学もハーバード、プリンストン、エール、コロンビアなどの各大学と同様、私立の大学でありながら学術的水準の高いことで一般に聞えている。ただ最近の傾向としては、各私立大学の財団はインフレーションの結果、その財政が漸次苦しくなってくる反面、各州立大学（アメリカの国立大学は既報のハワード大学という黒人の大学だけで、公立の大部分は州立）の財政力が逐次私立の大学を凌駕して、設備と教育内容の充実をはかり同時にその学術的水準の向上を実現しているので、加州大学（州立）の工科等は全米一といわれている。

この大学も御多聞に洩れずその財政は苦しいわけで、千四百万ドルの基金から生ずる収入と一人年額六百ドルの授業料による収入を併せても大学の経費の半分程度にしかならないので、残りの大部分は政府並に軍関係の委託による研究費収入に依存している始末である。もちろんかかる変態財政は永續するはずのものではないので、私は事務官長のパーフォード博士に

「教育ということは国の存立に至大な関係がある大切な事業であり、貴方の大学は歴史のある立派な大学で優秀な卒業生を多く送り出して国の発展に寄与しているのであるから、これを国立にするということは不可能なことではないように思うが御所見は」と聞いてみたところ

「わたしの大学はアカデミックなレベルの高いことで世界にその信用を博している。もちろん将来の大学財政は決して明るいものではないが、この信用さえ何とかして維持し向上せしめて行けば、この大学の財政が決して行詰ることはないと確信している。政府の援助に頼る気持は毛頭ない。現在のように対等の契約で研究原価を補償してもらっているだけでも、政府の役人が無闇にやって来て報告だ監査だとやられるので、そのレッド・テープ（いたずらに形式や手続に拘泥するやりくち）には泣かされているのだから」と彼は答えた。

その自由と独立をあくまで守り抜こうとする気概に感銘すると同時に、アメリカでさえも役

人の官僚根性が浸透しているのに、いささかこっけいな感じがした。ここでは日本人の留學生が九人在学している。

翌二十七日朝バルチモアを出た私は、再び汽車でウォ싱턴に行き、ナイロンで有名なジユ・ボン社を訪ねた。この会社は一八〇二年、仏人のジユ・ボン氏がこの地に創立したもので、現在では十四億八千万ドルの資本と九万の従業員を擁する米国有数の大化学工業会社である。世界の纖維界の革命児ナイロンは、この会社の研究所のカロサーズ博士によって發明され、この会社で工業化されたものである。私は研究所長クーリツジ博士を訪ね、昼食を共にしつつ研究所の模様を尋ねた。ここでは現在千八百人の技師と三千人を越える補助員が研究に従事していて、年額三千八百万ドルの研究費を費しているそうである。この研究費は製品原価の三%に当るといふ(アメリカの大きい民間会社はそれぞれ自己の研究所をもっているがその研究費は平均して概ね原価の一・五%位でしょうと博士は付言していた)。博士は、

「研究といふことは一見無駄のように見えるが、永い目でみると立派に採算のとれるものであることが、この会社の永い歴史が実証している。そしてこの研究は一つのチームワークであつて多くの頭脳を一つの研究目的に組織的に動員することが大切であるが、それかといつて個

人の自由な研究精神を抑圧することは避けなければならない。偉大な発見というものは、彼の頭脳に去来して終始動いて止まぬあるものを追って止まない風のように自由なそして空想的な個人のひらめきから生れるものだ。さらにもう一つ大切なことは、国全体の学術的水準が上ってきて終始強い刺激剤を供給してくれることである。その意味でこの会社ではフェローシップ（給費生）に毎年四十万ドルずつ支出している。これは各大学で優秀で貧困な学生（日本の育英制度のように凡庸な学生の生活費の補給とは趣きを異にする）の学資に充てるわけであるが、もちろん大学に任せきりで大学や学生はこの会社に何の義務も負わないわけだ。フェローシップと並行して、各大学の基礎的研究の財務的な支援もやっている。こうして全体の水準が向上することが何より大切であると思う。お国でも研究費を出し渋るようなことがないことを希望する。」と書いていた。

ジュ・ボン社を辞してから直ちに汽車をつかまえて夕刻フィラデルフィヤに着いた。ここは人口二百五十万でニューヨーク、シカゴ、ロスアンゼルスに次ぐ大都会であるが、古い都だけに道路が狭くいかにも窮屈な感じがした。十八世紀の末、米国の憲法会議が開かれたインディペンデント・ホールは街の中央にある。翌朝郊外にあるバット車両工場を一巡してステンレ

ス・スチールの客車を造っている現場を隔なく見学した。ステンレス・スチールで車体を造ると、重量が三分の二になり維持費が殆んどかからないから燃料と労力の節約になるわけで、インシャル・コストが高いけれども、国内はもとより各国から注文が殺到している状況である。工場は流れ作業式になっていて、最終工程で毎日二台ずつの銀色の客車車両が引込線上に艶姿を現わす仕組となっている。私が見た時はちょうどイラン向の車両が出来上ったところであった。昼食時になったので工員の様子を見てみると、工場の食堂にはいる人はまれて各自自分の職場で粗末な紙の袋からパンやサンドウィッチをつまみ出してかじっていた。工場の周囲の空地には何百台という工員の乗用自動車が行儀よく整列しているが、あの自動車で通勤する人達の食事としては簡単なものだと思われた。

バット工場からは新しい住宅が次々と建てられている郊外を十五マイルもドライブしてフィラデルフィア駅に辿りつき、ニューヨーク行の汽車に乗り込んだ。もちろんステンレス・スチールで造ったスマートな客車である。汽車は半ば紅葉した森の中を、まっすぐに貫く線路を走って、廿八日夕刻、ハドソン河床の地下道を抜けて、ニューヨーク市が巨体を横たえるマンハッタン島に滑りこんだ。

建国の偉人

ワシントンの街外れには、ポトマック河が豊かな水量をたたえて静かに流れている。東京の隅田川よりやや大きい河で、その河岸一円が公園になっていて市民や見物客で賑わっている。そこにアブラハム・リンカーンの記念館がある。白い立派な建物でリンカーンが椅子に座った等身大の白い石像が安置しており、そこには、「ここにアメリカ国民のために連邦を救ったアブラハム・リンカーンの追憶が永久に神鎮まっている。ちょうどアメリカ国民の心のなかに彼の追憶が生きているように」というような意味の碑銘が刻まれている。全米から集る見物客が敬虔な態度でこの大きい石像を仰ぎ、何かしきりに語り合っている情景は美しい。そして、その記念館の屋根石には四十八州の名が刻まれているところを見ると、この記念館も最高裁判所と同様、各州からの寄附で出来たものに違いない。

ポトマック河を渡った対岸の小山は墓地で、その中に合衆国のために尊い犠牲となって倒れた無名戦士の墓がある。この墓はリンカーンの記念館位の大きい建物になっていて、全米の各団体から贈られた金属で作った花環や盾が美しく飾られている。そしてこの建物の背面には露

天の大きい式場があつて、沈黙の凱旋勇士の国葬が行われるという。その正面の屋根には「軍務について決めて市民たるの自覚を捨てなかつた」というジョージ・ワシントンの言葉が刻まれている。軍務についても決して市民たるの自覚を捨てなかつたのだといふこの言葉は、独立軍の司令官に推された時にも、大統領に選ばれた時にも、任務がすめばいち早く辞任して故山ヴァーノンの百姓になつて帰つて行つたワシントンの敬虔な気持がよく出ている。そしてこの精神こそがこの国の建国の精神にもなつてゐるのだ。

そこから十五マイル程小山をドライブすると、ワシントンが育ち、耕し、そして死んで行つたヴァーノン山がある。山といつても小高い丘で、この丘にはワシントンの生家やその附屬家が昔のままに保存されている。彼が永久に眠つてゐる墓所があり、その麓にはポトマック河が悠々と流れている。ここはワシントンの祖父のジョン・ワシントンが一六七四年に手に入れた場所で、一七三五年にジョージが三歳の時父と共に移り住んだところ。広さは五千エーカーもある台地で、農業と牧畜兼営の豪農の屋敷と農園という恰好。一七五九年に彼はこの地でカスチスという未亡人と結婚したが子供がなかつたので、その未亡人の二人の女の連れ子を大事に育てた。今も昔のままの寢室と寢台と調度品が保存されている。一七七五年、彼が独立軍の司令官に選ばれて、六年間の激しい軍務につき、戦が終つて疲れきつた足を歩んだのもこの地で

あつた。それはちょうどクリスマス夜の夜であつたという。初代の大統領になつて公的生活が八年間続いたが、一七九七年には再びこのヴァーノン山に歸つた。そしてその年の十二月十四日に彼はこの地で永眠した。生家から三、四町離れたところに彼の遺骸は愛妻マルタと共に大理石の棺に安置されている。この山を訪ねるものはくびすを接して跡を絶たないが、遺骸にぬかつて建国の偉大な市民を欣慕している。

ワシントンとリンカーン。この二人の偉人は何れも何であるよりもその前に市民であり、平民であつたわけだ。それだけに名もない国民に追慕され、親まれて、市民的自覚を基調としたアメリカ国民の団結の象徴になつてゐる。ヴァーノン山を降りる道すがら人のよさそつな男が、その家族を顧みて

「ヘリコプターをジョージにやりたかつたね。」といつて與じていた。

「ワシントン在世の時代には、今日のヘリコプターはなかつたが、若しヘリコプターをジョージにあげれば、ヴァーノンの山肌にも発着が自由であるから、嗚々ジョージは悦ばれたに違ひあるまい。」

というのが、この一市民の思いつきであつたらう。夕陽に映える彼の明るい顔が、私には、美しく見えた。